新刊紹介

親鸞聖人眞像の研究　藤原猶雪著

表題の如き藤原猶雪君の近著は、例言に述べてある通りに昨年圖書館雜誌に發表されたもので、該雜誌は早速小生の手許にも惠送に預つたが、更にこれを單行本にして、裝幀紙質印刷ともに善美を盡してわが机上に賜はつたことは實に幸慶の至である。この研究の材料とせられたものは主として去る大正七年の親鸞聖蹟巡拜の時の採訪に係り、當時その行を共にした小生としては、說き去り說き來らるゝところ一々し回顧追懷の情にうたれざるものなく、他の讀者よりはより深く多大の興味と親鸞を感ずることはいふ迄ない。小生はむしろ本著を客觀的に批評する適任者でないと思はれるほど、著者に近づいて居るが、然し又それだけ內的に觀ることも出來やうかとも考へられるので、臆面もなく讀後の感想を述べて見たい。雜誌で既に讀ませて貰ひ、今日再び繰返して一讀させて貰つたことは甚だ光榮とする次第で、藤原君の著書を批評するといふよりは、小生自身の書いたものを讀みかへすといふような心持で記さうと思ふから、著者に對する無禮は預め御容赦を願つておく。

（一）　先づ親鸞聖人門侶の地理的分布を概觀する一著手として「交名」が擧げられてゐるが（二頁）、鎌倉時代の吾妻鏡にこの文字の屢々見ゆてゐることはいふ迄もなく、これが傍證に供し得ることは至當なことであるが、「交名」なる文字そのものは鎌倉時代に初つた譯ではなく、奈良朝時代から既に用ひられてゐたことは、大日本古文書たとへば天平十二年の遠江國濱名郡租帳交名帳等を見ても明かである。「交名」のついでに一寸奈良朝時代まで溯つてその由つて來るところを明かにしたいものであつた、なほ親鸞門侶の交名帳は藤原君の擧げて居られる外にもなほ存することは本誌第二卷所載の佛光派寺院に傳はれる宗祖門侶史料（日下無倫君）の參照を請ふ。

（二）　常陸の地理的區分を考へる上に洞院公賢の拾芥抄が引用されて居るが（九頁）、拾芥抄はいふ迄もなく室町時代の作である。勿論これによつて南北朝頃の有樣の察せられる譯であるけれども、遡つては和名抄の參照があつてほしかつた。前後照合して中間の鎌倉南北朝時代の實際がより正しく窺へたであらうと考へる。

（三）　彌陀如來名號德と其年十月二十一日唯信宛の聖人消息との關係あるが（一八頁）、名號德には文應元年十二月一日の奥書があるけれども、消息は何年のものか、何れその前後に違いないにしても明確に決定することは出來ない。著者は消息を引いて「十二光佛の心事とは全く彌陀如來名號德の內容でありまして、卽ち此の秋に本書を記されたのでありますから寸毫も疑ふべき餘地はありませぬ」といつて居られるが、それにしても「此の秋」といふことは何を根據していはれたのであらう。たゞ日附だけで行けば消息が十月二十一日、名號德は十二月二十六日で、消息の方が前立つて居るのである。名號德の書寫が前後

幾回も行はれたことを明かにしない以上、この日附を同年とすることはどしても不合理である。微細なことであるが、この逸の解釋は如何なものであらうか。

（四）鳥栖の光明本（二六頁）については、存覺袖日記に貞治三年に鳥巣の使が來て、本尊を附與した手控が殘つてゐるから時代考定の上に確實な見込の立つ、基準に供することが出來るが、貞治三年の記事に著眼されなかつたのは殘念である。

（五）高田覺信の書面を某年四月七日とするが（三一頁）、これは在來說のある通り建長八年に間違ない。專修寺にそれに對する聖人自筆の返狀（五月二十八日附）の原本が現存するのであつて、「專信房京ちかくなられて候」云々の文言からいつても建長八年とするのが至當である。著書がふと逃べられたことであらうが、一寸注意してほしかつた。

（六）西本願寺の鏡の御影は「極めて素朴な墨繪」（三四頁）とあるが、墨繪には違ないが、美術史の方で用ふる水墨畫と混同され易い語弊があるから、白描畫とか、白畫とか說明されたかつた。

（七）聖人の容貌に關して甚だ細密に述べられて居るが（三八頁）、眞像とあるからには容貌風采だけではなしに、服飾の方面についても敍言を費してほしかつた。（訂正すべき點あるが、本誌第一卷に發表した拙稿「圖像より見たる親鸞聖人」參照）。

（八）「光明本なるものが縱會聖人の在世中に纏つたものがなかつたとするも」とあるが（三九頁）、尊號眞像銘文なり三帖和讚の研究から出發して、今日に於ては、聖人の時代に既に光明本の成立してゐたことは疑ないと信ずる。況んや桑子妙源寺の光明本の銘が聖人の眞蹟なりと斷定すべき價値あるに於てをやである。著者は眼福を得ぬと斷はて居られるから責めるのではないが、兎角妙源寺光明本の價値を低く見られるのは誤れりと斷言したい。この點に就ては今後の研究を大いに期待したい。

（九）聖人の墓標に關して著者の擧げられて居るもの、外、三河妙源寺の國寶掛軸繪傳、同長瀨願照寺繪傳等徵すべきものが少なくない。他日遺漏の補はれることがあれば幸ひである。

小生は右の如く九箇條を列擧して、小生の不審とするもの、又は補闕を要する點或ひは多少見解を異にするものを略盡した。然しながら小生の考へとても決して十全なものではなからう、更に著者の高見をも拜聽することが出來て、小生の淺學菲才を啓發されたならば實に慮外の幸福である。

親鸞聖人傳なり原始眞宗敎團の研究は今なほ發達の道程にあつて、諸種の困難な問題や未解決の問題が橫はつてゐるが、かくの如き秋に當つて著者が細大洩らさず材料を蒐集調査され、こゝに未だ曾て試みられなつた事項を取扱ふて一卷の書に纏め上げられた其熱心と努力とは沒するべからざる功績と云ればならぬのであつて、單に親鸞聖人なり原始眞宗敎團の研究に從事するもののみならず、ひろく佛敎史學界にあるものゝ等しく感謝措くべからざることは言を俟たぬ。最後に小生が無禮なる言を書き列れたことに對しては、至大の寬恕を乞ふと共に、著者藤原君の健在を衷心より念じてこゝに謹んで敬意を表する。菊判布裝五六頁卷頭圖版十六枚價一、五〇、東京森出版部發行（正）

佛教美術講話

小野玄妙著

著者は多年佛教美術の研究に沒頭し、既に數種の著書を爲して、佛教美術學者たる位置を得た人である。由來佛教美術の研究は却て僧侶以外の俗人に依て企てられ、幾多の著書は凡て俗人の占有する所となり、甚だ遺憾であつたが、近來小野氏頻りに此が研究を發表せられ、聊か心强う感ずる次第である。本書は部門を佛傳畫、本生畫、佛形像、世界圖、淨土變相、曼荼羅諸尊像の七編に分ち、更に各編の下に於て大小幾多の寫眞を挿入し、一々懇切に解題と圖說とを附して、此種の問題の殆ど凡てを網羅して居る。大圖二百、小圖八十四、六百六十八頁の大著、研究者及び初學者の爲に推奬して恥しうない立派な書物の一として數へらるべきものと思ふ。價九圓、發行所東京市芝區芝公園五の十藏經書院。（舟）

略述淨土教理史

望月信亨著

全體を十四章に分ち、初め三章に於て經典に顯れたる念佛往生、稱名往生、聞名往生の說を指示し、次六章に於て龍樹、天親、曇鸞、善導、源信、源空の六祖の教理を述べ、終り五章に於て門弟諸家の教理を批評したものが卽ち本書である。寫眞版は十一葉入て居る。四號活字ではあるが四三六頁の大著である。淨土宗系統の淨土教理史としては法然上人の教理を中心とすべきであるが、本書は法然上人の教理が六六頁あるに對して、門弟諸家の教理は一九〇頁ある。中に於いて親鸞聖人の教理及びその批評が六六頁に達して居る。して見ると本書著作の目的は、或は眞宗攻擊を主とするものではないかと思はれる。元は講習會の講演だと云からあまり學究的でないのも無理はないが、土導の御疏に批評を加へた當年の勇氣を以て、行きつまつた淨善宗の教理に何故に批評を加へないかゞ如何にも疑はれるのである。淨土宗から見た淨土教理史を知るには兎に角一の書物として數へてよいと思ふ。價五圓、發行所東京市小石川區表町淨土教報社。（舟）

太子所行讃

赤木桁平著

本書は著者が「我歷史的人物中の最高最美な典型であるとする聖德太子の人格と業蹟とを能ふかぎり簡潔に叙述しやう」としたものであつて、序說を初として二十八節より成る。而して「此小册子には當然必要であると思はれる考證や說明のすべてが省略されてゐるが、此小册子の如何なる部分に現れてゐる斷定でも、一として著者の嚴格な論理的乃至事實的反證を根據として生れて來ないものはない」と自奬されてゐるだけあつて、周到な注意の下に研究を概括したやうに窺はれるが、然し嚴密に見て行くと瑕瑾と見做すべきものや誤謬とすべきものが全く無い譯ではない。それは人間の作つたものであるといへばそれ迄であるが、單に一讀して氣づいたもの一二を擧げるとすれば百濟の聖王（著者は聖明王とする）の在位を西曆五二三年——五五三年とするが（第二六頁）、五五四年までとするのが正しい。又第四二頁に任那はもと新羅の領土であつたやうに述べてある。

が前條と共に朝鮮史の研究の不足に歸すべき誤謬である。新羅征伐については日本書紀ばかりに頼らずに、朝鮮側の史料によつて半島の形勢を窺はれば實際に離れればならぬことになる。第八三頁の片岡山の御歌、第一三四頁の巨勢三杖大夫の歌には些細ではあるが誤がある、書紀及び法王帝說の本文の精閱を望まざるを得ぬ。第一三三頁の「發病から二十二日の二月二十一日が來た」とあるが、正月二十二日から數へて二月二十一日が二十二日目に非ざることは瞭々の事實に屬する。その他第一二八頁の太子の王子女都合十四人とすることや（正しくは十三人でなければならぬ）、遣隋使に隨行したものを留學生八人とすること（正しくは留學僧四人留學生四人）など、史實に對する用意が可なり粗雜であるやうに思はれる。憲法十七條に比べて上宮御製疏に關する說明の餘りに簡潔に過ぎるのも聊か物足らない又法王帝說の書名を用ひずに、何時も「一僧侶の手記」とするが帝說がはたして確實に僧侶の手になつたものかどうか決定し難い實際に照して、如何に固有名詞を儉約するためとはいへ、穩當を缺くといはねばならぬ。それとも著者が新發見の根據に基かれてゐるのであらうか。もしさうであれば速かに妄評を撤回して示敎を仰ぎたい。以上著者の端書の堂々たるに脅かされて不敏繙讀の際納得し難い點一二を提出した迄である。讀者諸君の要望するところが聖德太子の人格と業蹟とに對するより以上の細微な考案と廣汎な知見とにあるならば、どうか著者が目下執筆中である『飛鳥文化の建設者と其時代』と題する書物の出版まで待つて頂きたい。その書物に於て著者は此小册子が讀者諸君に與へるであらう不滿の大部分を充分に補塡し得るに相違ないと信じてゐる」と見ゐてゐるから、讀者の一人として不滿といへば以上述べたやうな點の大部分が十分に補はれんことを切に待つ。菊判布裝一四〇頁、價金一・八〇、東京大村書店發行。

（正）

最近佛教關係雜誌論文一覽

（大正十年九月ノ一部・十月・十一月）

（A）佛敎研究

大乘起信論と華嚴經　村上　專精　哲學雜誌十一
般若經と涅槃經の交涉　安藤　州一　眞宗の世界十一
俱舍論の考察　加藤　秀旭　無礙光九、十、十一
伽他佛說論を疑ふ　渡邊　楳雄　哲學雜誌十一
敎行信證後序に對する一考察　梅原　眞隆　佛國十
大經に統べられたる法華經と華嚴經　同　六條學報十一
安心決定鈔と蓮如上人　横井　信空　同
敎行信證に現はれたる論、論註　小山　法城　同
敎行　書に現れたる四帖疏（下）　川尻　宏濟　同　十